

名古屋学院大学

2026 年度総合型選抜 出題の意図

試験区分	特別奨学生入試
試験日	12月6日
科目	国語

大問Ⅰは渡邊雅子『論理的思考とは何か』を題材としました。この文章では、「感想文」にはどのような種類があるのか、それらに共通する型は存在するのか、それを書くことで個人の思考・感性・価値観にどのような影響がもたらされるのか等々について筆者の考えが展開されています。そのため設問としては、漢字問題や接続詞問題に加えて、感想文を書くことの意義についての筆者の主張を正しく理解できているかが確認できるものを作成しました。

大問Ⅱ

問題全体

本問は、ハナムラチカヒロ氏の『まなざしのデザイン』を題材に、人間の知覚や認識の不確かさと、それがいかに外部から誘導されるかというテーマについて論じた文章を読解するものです。筆者は、私たちの脳が情報処理の効率化（コストカット）のために微細な変化を捨象している事実や、マジシャンがその隙を突いて行う「変化の操作」を例に挙げ、私たちが信じている「現実」や「常識」がいかに脆い基盤の上に成り立っているかを解き明かしていきます。さらに論考は、個人の知覚の問題にとどまらず、社会的な「常識」や「幻想」の共有という側面へと展開し、固定化されたまなざしを相対化するための方法論（あえて別の幻覚を上書きすること）を提示しています。認知科学的な知見と哲学的な考察が交差する本文章は、「常識」や「事実」を批判的に検討する姿勢が求められる大学での学びにふさわしい良質なテキストです。

設問では、筆者の独自の定義（「変化とはコントラストである」等）を正確に理解する力、マジックという具体例から抽象的な論理を抽出する力、そして「大人のほうが騙されやすい」という逆説的な事態の理由を論理的に説明できるかを問いました。表面的な字面を追うのではなく、筆者の思考の軌跡を論理的に追体験できる読解力を測ることを意図しています。

問1

文章の論理的な展開を正確に把握するために不可欠な、接続語および副詞の機能を問いました。文脈の前後に置かれた事象が、逆接、順接、あるいは換言のいずれの関係にあるかを構造的に理解できているかを判定する基礎的な設問です。

問2

傍線部A「小さな変化には目が向きにくい」について、その生物学的・脳科学的な要因を本文に即して理解しているかを問いました。筆者は脳の機能を「情報をコストカットしながら、大体の感じで周囲の物事を捉えている」と説明しており、この「効率化」のメカニズムと「変化の見落とし」との因果関係を的確に結びつけられるかが解答のポイントとなります。

問3

筆者が提示する「変化とはコントラスト（差異）である」という独自の定義について、その内実を正確に説明する能力を問いました。一般的な意味での「変化」ではなく、空間的・時間的な「差」があって初めて情報として認識されるという、筆者の主張を正しく解釈できているかを確認するものです。

問4

傍線部C「変化のコントロール（操作）」について、マジシャンが具体的にどのような手順で観客の知覚を欺いているのか、そのプロセスを説明する能力を問いました。「小さな変化」を積み重ねて「大きな変化」に見せるという物理的な操作と、その途中の因果関係を隠蔽する心理的な誘導（ミスディレクション）の複合的な仕組みを理解しているかが鍵となります。

問5

傍線部D「こうした錯覚は物事の因果関係を推測できる大人の目にしか通用しない」という、一見すると常識に反する逆説的な事態について、その理由を論理的に説明する能力を問いました。子供は物理法則や因果関係の理解が未熟であるため、逆に「矛盾」を感じないのに対し、大人は「常識」や「因果律」という強固な枠組みを持っているがゆえに、その整合性が崩れた瞬間に強い錯覚（驚き）が生じます。この「知性や常識があるからこそ騙される」という逆説の論理構造を、的確に読み取れているかを評価するものです。

問6

傍線部E「私たちが見ている現実や常識は、もともとある種の錯覚だらけなのである」について、筆者が世界をどうとらえているかを正確に理解しているかを問いました。筆者は、人間が物理的な現実をそのまま受容しているのではなく、個人の願望、先入観、知覚の特性といったフィルター（想像力の誘導）を通して、歪められた形で「構成」していると説いています。単なる「見間違い」ではなく、人間の認識が内包する構造的な不確かさを、本文の文脈に即して一般化して説明できるかが解答のポイントとなります。

問7

傍線部F「この仕掛けと技術」について、マジシャンが幻覚を生み出すために用いる二つの異なる手法を具体的に区別・整理する能力を問いました。「仕掛け」という物理的な準備（タネやからくり）と、「技術」という心理的・身体的な誘導（ミスディレクションや話術）の違いを、本文の記述に基づいて正確にカテゴリー分けできているかを確認する、情報整理力を測る設問です。

問 8

傍線部G「常識的な大人の眼を持っている人ほど……盲点を突かれる可能性がある」について、問五で扱った知覚レベルの錯覚を、社会的な詐欺やマインドコントロールの文脈へ応用・展開して理解できるかを問いました。ここでは、「自分は物事を中立的に見ている」という過信（メタ認知の欠如）こそが、既存のパターン認識への無自覚な依存を生み、かえって外部からの誘導に対し脆弱になるという皮肉が語られています。この「主体的だと思っている人間こそが操られやすい」という逆説的な構造を論理的に説明する力が求められます。

問 9

傍線部H「幻覚をもって現実をあばくこと」について、筆者が提示する最終的な解決策（認識のあり方）の真意を読み解く能力を問いました。筆者は、人間が「まなざしの曇り」から完全に逃れることは不可能であるという前提に立っています。したがって、唯一の「真実」に到達しようとするのではなく、あえて「別の幻覚（視点）」を導入することで、現在の認識（幻想）を相対化し、現実が固定的なものではないと自覚することこそが重要だと説いています。この「毒をもって毒を制す」ともとれる解決策を正確に解釈できているかを評価するものです。

問 10

本文全体の論旨を要約した文章の空欄補充を通して、筆者の主張の全体像を構造的に把握できているかを問いました。「微細な変化（コントラスト）の見落とし」から始まり、「想像力の誘導」による認識の歪み、「常識」という社会的幻想への言及、そして最終的な解決策としての「現実が固定されていないこと」の自覚に至るまで、論理のフローを一貫して捉えられているかを確認する総合的な設問です。

（なお、筆者は「現実誘導されている」という現状分析については本文全体を通じて繰り返し言及していますが、そこから脱却するための具体的「解決策」については最終段落において初めて提示している点に留意が必要です。筆者は単に「誘導の事実を自覚すること」自体を解決策としているのではなく、「別の幻想を上書きすること」によって逆説的に現実の可変性を露わにすることを提唱しています。空欄 29 は、こうした「現状分析」と「解決策」の論理的な階層の違いを正確に区別し、筆者の最終的な結論を的確に読み取れているかを判別する意図を含んでいます。）